八戸工業高等専門学校図書館

NEWSLETTR

R2年度第1回(R2.12.25)
発行:八戸高専図書委員会　　編集:E・M図書委員
レイアウト:Z3図書委員

先生とM・E科図書委員がおすすめの本や作家を紹介します。このNEWS LETTERが素敵な本や作家さんに出会えるきっかけになれば幸いです。

『精霊の守り人』　上橋菜穂子

（No.1　L1　木村 廉）

この本は精霊の卵を宿した皇子チャグムを新ヨゴ皇国の二ノ妃 から託された女用心棒のバルサが、父帝からの刺客や異界の魔 物から幼いチャグムを守るため、身体を張って戦い続ける物語 です。今まで読んだことのない世界観で、読者を不思議な世界 へと誘うことでしょう。大河ドラマ化もされており、ぜひおす すめしたい一冊です。

『蜘蛛ですが、なにか？』　馬場翁

（No.2　L2　清水 志ノ伸）

勇者と魔王が戦い続ける世界。戦いの最中放たれた大魔法は、次元の枠を越え、地球の高校の教室で炸裂した。その魔法に巻き込まれ、教師を含めた生徒全員は即死した。しかし、彼らの魂は、時空を渡り、勇者と魔王が争う世界で飛散し、それぞれが新しい命として生まれ変わる。そして…。今世であろうことかエルロー大迷宮とやらで蜘蛛の魔物に転生してしまった「私」は、圧倒的強者がウジャウジャいるこの地獄で波乱万丈な人生、いや「蜘蛛生」を送ることとなるのだった。
２０２１年にアニメの放送が決まっている人気のライトノベルで、とてもオススメです。

『グラスホッパー』　伊坂幸太郎

（No.3　M5　金濱 優太朗）

この本は1人の殺し屋「押し屋」を巡る3人の男達の物語です。妻を殺され、その犯人が押し屋によって殺された「鈴木」、自殺専門の殺し屋「鯨」、ナイフ使いの若者「蝉」、それぞれの思いが交錯する時、それぞれの身に待つ運命とは、そして最後に「押し屋」に辿り着くのは誰なのか、それぞれの物語と共に、疾走感溢れる作品となっています。
2015年には映画化もされているため、映画と合わせて是非読んでみてください。

≪先生からのおすすめ≫

『旅のつばくろ』　沢木耕太郎

（総合科学教育科　中村 雅徳）

ご存知の方も多いと思うが、沢木耕太郎氏は二十六歳の時のユーラシア大陸横断をまとめた大ベストセラー紀行小説「深夜特急」の著者である。このバックパッカーのバイブルによると「旅の適齢期は二十六歳」だそうだが、私がシリーズを読んだのは、適齢期を過ぎ、学位取得の頃だった。何もかも投げ捨て、あてもない、期限を決めない自分探しの旅に身を投じる余裕も勇気もなかったが、著者独特の乾いた文章で綴られる様々な土地の空気感や匂い、そして時には著者の心情に漂う悲壮感、爽快感などを通して自分の知らない世の中を感じ取ることができた。
今回ご紹介するのは、沢木氏による国内旅エッセイである。たまの帰国の際、新幹線の車内誌に掲載されていたこともあり、目を通していた。熱心な沢木ファンではないが東日本を舞台に綴った紀行ということもあり、自然と手が伸びる。著者の感性が切り取る情景や人々が、それぞれの旅を魅力的なものにしていることは想像に難くない。今春、これまでの連載が「つばめのように軽やかに。そう、人生も、旅も。」というコンセプトで一冊にまとめられた。現実はそうはいかないことも多いが、読後の心持ちは軽くなる。沢木氏の柔らかい感性と独自の観察眼で綴られた紀行は、行き先だけが全てではないということも思い知らされる。この旅は著者が16歳で廻った東北地方でのやり残しを回収するものでもあり、５０年という時を経て当時の自分と現在を紡ぐ人生への回帰も込められている。一方で私は、故郷に近い北東北でさえも、その魅力にほとんど気付かないまま人生の大半を過ごしてきたことは確かなようだ。放浪の旅もしてこずに、若い時に一度は旅に出ようなどと、無責任な言葉を並べるつもりはない。自分探しに旅が不可欠なのかもわからない。普段の生活、経験からとて、持ち前の感性があれば、そのチャンスは広がっているのだろう。ただ、自分にはそのセンスが乏しかったのは紛れもない事実だ。私が携わってきた天文学は多波長の電磁波観測を通して宇宙を解明する学問でもある。他人の目を通して世の中を知り、自分を知ることはたくさんあると思う。このエッセイは、まさに身近な東北の地でそれを体感できるサンプルであろう。インドやネパールでしか得られないもの、も沢山あるのは私も経験から納得できる。しかし、馴染みのあるこの土地やまわりで知らないことも山ほどある。そんな身近な発見をこれから楽しめたらと思う。著者は50年前にたどり着けなかった竜飛岬で強い風の吹く中、いくら立ち尽くしても、少年のときの思いを甦らせることはできなかったようだ。しかし、16歳で思い立ち東北を巡ったことは、その後の旅の仕方や生き方のスタイルに深く影響を与えたという。日本を離れて18年。馴染みの場所に30年ぶりに戻った今、私も時間軸を跨いで自分を振り返ってみたい。

「正しい愛と理想の息子」　寺地はるな

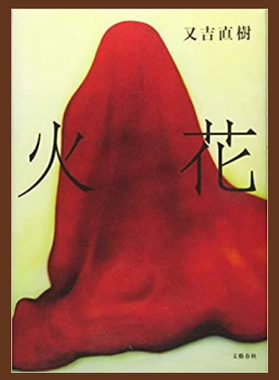
（No.4　M2　熊谷 洋飛）

愛って本当に、世の中で言われるほど、きれいで尊いものなのか？そんな疑問から生まれた作品です。この作品は二人の男たちを中心に描かれます。二人の名はハセと沖であり、違法カジノで働いていました。しかしヘマをして借金を２００万円も抱えてしまいます。そこで沖のかわいらしい見た目を武器に、寂しい女をたぶらかして偽物の宝石を売りつけていました。しかし、だました女に逆に騙されて…

様々な愛の形について考えさせられる作品です。ぜひ読んでみてください。

『火花』　又吉直樹

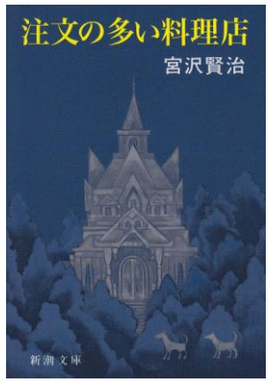
（No.5　M3　若竹 勇人）



芸人が書いた芥川賞受賞作という、どこか色モノと認識して手に取ったこの作品。良い意味で裏切られた。文学とは何か語れるほど知識があるわけではないが、きちんと文学作品だった。芸人として生きた人だから書ける芸人の心の機微や諸々を文字として読めたことが嬉しい。漫才師、芸人の生き方というのが、又吉さんの人生観を通して、表現されているような気がした。芸人として生まれて、芸人として死ぬ。次は映画を見て、目で楽しみたいと思う。

『注文の多い料理店』　宮沢賢治

（No.6　M4　舘 海斗）



この本は言わずと知れた東北を代表する作家であり詩人の宮沢賢治の 代表作のひとつです。この本はコメディー的な要素がありながら、少し 寒気がするようなホラーな要素もある不思議な雰囲気漂う作品です。　この作品は短編作品であり読書が大好きな人はもちろん、本を読みな れていない人でも楽しんで読むことができます。気軽に読むことのできる 作品なので是非読んでみてください。

『いつか天魔の黒ウサギ』　鏡貴也

（No.7　E4　神 優音 ）

宮坂高校1年、鉄大兎は平凡で普通な少しつまらない日々を過ごしていた。そんな毎日を壊したのは首と胴体を切り離してしまうほどの交通事故。確実に死んだと思った鉄は、昔の記憶と共にその命を蘇らせる。記憶から突如湧いて出てきた「使命」――失われた「彼女」の笑顔を取り戻すために、鉄は平凡な日常を捨て「世界」との戦いを始めるのであった。

『リアル鬼ごっこ』　山田悠介

（No.8　E2　上岡 巧都）

この本は、王様が管理する国の、残虐な物語のミステリー小説です。王様は自分が唯一の存在だと主張し、自分と同じ苗字の者を殺せと命令を出します。しかし、ただ殺すだけではつまらないと考え、夜の12時から捕まったら死を意味する鬼ごっこを開催します。主人公はその理不尽な恐怖からどう逃げ切るのか…。

まるで崖の縁を歩くような生と死の狭間の恐ろしさを感じられる作品となっております。有名な作品ですが、まだ読まれていない方はぜひ読んでみてください。

『博士の愛した数式』　小川洋子

（No.9　E3　服部 慎司）

この本に登場する28才の「私」は家政婦として64才の数学者だった「博士」の家に派遣されます。その博士は、数学が大好きでそれ以外のものには興味を示さないほどです。最も重要な事として博士は、記憶が80 分しか持ちません。そんな博士と「私」が数学を通して家族のように仲が深まっていきます。数学が苦手な方でも読みやすい本なので是非読んでみてください。

『芥火』　乙川優三郎

（No.10　E5　岡田 亘司）

この本は江戸の武家、女郎屋、染物屋など様々な立場にいる主人公達が人間関係のしがらみの中、前を向いて生きていく様子を描いています。

今とは全く違う役職や慣習、現代と比べてほとんど自由の無い環境で生きる人々の人間模様に思いを馳せるのも時代小説の醍醐味ですが、それを紡ぐ言葉―つ―つの流麗さ、よどみのない日本語の描写もこの作者の、ひいては時代小説の良さだと思います。

カタカナや英語の無い文章を最後に読んだのはいつですか？

これを機に読んでみてはいかがでしょうか。